

平成 24 年度氷見市教育総合センターだより 特集号

～習得・探究・活用の力を高める学力向上への取組～

氷見市教育総合センター 学力向上(小中連携教育)推進委員会作成

メールアドレス kyouikukenkyu@city.himi.lg.jp

ホームページアドレス <http://www.city.himi.toyama.jp/hp/menu000000500/hpg000000416.htm>

子どもの目の前の霧を晴らしたい

委員長 米田 典子

学校が果たすべき最大の使命は、子どもたちに「確かな学力」を付けることである。今日求められる学力とは、「習得した知識及び技能を柔軟に活用し、自ら課題を探究・解決する力」である。

本推進委員会は、「確かな学力」を向上させるために具体的な方策を立て、実践を通して検証し、授業改善していくことをねらいとしている。9名の推進委員が子どもたちの学力の現状と課題を明らかにし、その課題を克服するための授業改善に取り組む。

子どもは、「分かった」「できた」という体験によって学ぶ意欲が高まり、さらに伸びようとする力をもっている。言い換えれば、課題解決への行く手をさえぎる霧で前が見えない状態は、子どもにとって辛く悲しいことである。一人一人の子どもの思考のつまずきを見極め、的を射た指導によって、子どもの目の前の霧を晴らしたい。これが私たち学力向上推進委員全員の思いである。そして、私たち教師も子どもたちに負けないように、考えを構想する力、分かりやすく伝える力、学び合う力を付け、授業力を向上させていきたいと考える。

小学校・中学校における生徒指導面での連携について

小中連携で緩やかな変化を

副委員長 金瀬 志津

ノーベル物理学賞を受賞した江崎玲於奈氏は、普段歩く道を、毎日少しずつ変えて、自身の大なる創造性を刺激していたそうだ。少しずつ変化させることで、日々新たな気持ちで興味・関心をもち続け、対象に関わることができる。このことは子どもたちの学校生活においてもいえるのではないか。学年が上がるごとに少しずつ難しくなる学習内容や重くなる責任に対して、子どもたちは臨機応変に対応している。

しかし、その変化があまりにも急激すぎると、それについていけない子どもたちが出てくる。小学校から中学校に進学したときに、学習内容や生活リズムの変化に馴染むことができず中1ギャップに陥ってしまう子どもたちである。学校に行きたくても行けない、学校における自分の居場所が見付からない。そういう子どもたちを一人でも減らすために、学力向上推進委員会では生徒指導における小中連携の在り方も探っており、現段階では、以下の項目について検討している。

- <生活面>
- ・気持ちのよい挨拶をする。
 - ・言葉遣いに気を付ける。
 - ・携帯電話は持ってこない。
 - ・髪は染めない。
 - ・いじめにあたり見たりした場合は、教師に知らせる。
- <学習面>
- ・指名されたら「はい」とはっきり返事をする。
 - ・相手に合わせて、声の大きさ、スピード等に気を付けながら話す。
 - ・教師や友達の話は最後までしっかりと聴く。
 - ・授業の開始時刻、終了時刻を守る。

学習指導法や学習規律を含む生徒指導の方策については、学年の発達の段階に応じて変えていかなければならない面もあるが、規範意識等根底に流れるものは小中全教職員で共通理解して指導に生かしていく。そうすることで、小学校から中学校への変化を緩やかにすることができるのではないか。その緩やかな変化の中に子どもたちが安心して生活したり学習に取り組んだりする場を構築し、学習意欲の向上へとつなげていきたいと考える。

国語

「苦手」から「楽しいな」へ

比美乃江小学校 飯山 真貴子

4月に新しく3年生のクラス担任となった。クラスの子どもたちは、順序立てて文章を書くことができた。しかし、形式だけ決まっただけで自分の考えを自由に書く文章は苦手とする子どもが多かった。そこで今年度の「付けたい力」を「書く力」とした。

1学期は、国語科「気になる記号」を通して、「書く学習」を進めた。集めた情報を分類することが難しかった子どもや、自分なりに分類整理はできたものの、類似点や相違点を見付けることが難しかった子どもがいた。そこで、友達の発表や教師の挙げる例を見て見付けさせたり、報告文にまとめる際には、構成文の組立て表を取り入れて書かせたりした。そうすることにより一人一人が、最後まで学習を達成することができた。子どもたちは、自分なりに最後まで頑張って書いた報告文を、うれしそうに読み返していた。また、友達同士交換して読み合い、友達の頑張りも互いに認め合うことができた。

2学期も引き続き、「書く学習」を取り入れていきたい。自分なりの思いや考えを文章の中に表現できる楽しさや、最後までしっかり書くことができる達成感を味わえるような授業に子どもたちと共に取り組んでいきたい。そして、子どもたちが「書くこと」を「苦手だな」から「楽しいな」と思えるようになればと思う。



「付けたい力の明確化」と「言語活動の充実」

上庄小学校 山口 千香子

子どもたちが、思いや願いをいっぱい膨らませて、言葉の力を付けることができる国語科の授業を目指し、日々模索しながら教材研究に取り組んでいる。学力向上のための授業改善において「言語活動の充実」が重視されている今、目の前の子どもたちに付けたい力の明確化と言語活動の充実、という視点で授業づくりを行った。

第2学年国語科「ふきのとう」「スイミー」の学習では、「読むこと」のねらいを達成するために、保育園児や1年生に、音読発表会や紙芝居（ペープサート）で物語のおもしろさを伝えるという言語活動を選んだ。ねらいとする「登場人物の行動」「場面の様子」に着目して読むことができる、という力を付けるために、場面の様子が1枚ずつ絵とストーリーで表現されるという紙芝居の特徴を生かしたのである。そうすることで、子どもたちは、より叙述にこだわって想像したことを伝え合い、音読の工夫に生かすことができた。

明確にした「付けたい力」と「言語活動の内容」が、子どもたちの実態にぴたりと合
わさったとき、子ども自身が主体的に思考・判断したり、表現したりできるのではないかと考えている。今後も授業を通して、子どもの育ちを見取っていきたい。

主体的な読み手を育てる言語活動の工夫

北部中学校 松本 美和

説明的文章の学習において、生徒たちが意欲的に学習に取り組み、「読む力」を確実に付けていく授業づくりを行うにはどうすればよいのか。それが私の課題であった。そこで、活動が楽しいと生徒が実感でき、学びへの目的意識や学習意欲が高まるような国語の授業をつくるために、単元を貫く言語活動を位置付け、以下の工夫をした。

まず、本単元では、「聞き手を意識した紹介シートを作成し、発表会を行う」という言語活動の最終ゴールを具体的に示し、何のために学習に取り組むのかという目的意識をもたせた。このことは、文章を主体的、意識的に読むという点で有効であった。

次に、「活動あって学習なし」にならないように、内容紹介シートの作成活動を行う際、改善点を内包した2つのシート例を提示し、どのような構成や言葉で書けばよいのかを話し合わせた。このことにより、生徒たちは分かりやすさ、正確さを意識しながら、ノートにまとめたことを更に精選して、シートづくりを行うことができた。また、モデルを示したことは、書くことを苦手としている生徒の学習意欲を高める上で効果的であった。

今後も生徒が成就感や達成感を味わい、確実に力を付けていくことができるような言語活動の在り方を模索していきたい。

言葉を学ぶ 言葉で学ぶ

西條中学校 大窪 裕子

言葉は自分を語るときに道具であり、相手と自分をつなぐための手段でもある。言葉を通して考えを深めていく学習を取り入れながら、言語に対する感覚を豊かにさせ、伝えることを楽しもうとする姿勢を育てたい。

1学期、国語の学習で批評文に取り組んだ。教科書教材を基に進め、更に発展させていく中で、生徒たちはおおむね関心や意欲をもって学習に臨んでいた。しかし、自分の考えに合う言葉を探そうとするものの、語彙数が少ないために表現しきれない生徒が多かった。様子そのままの擬音語や擬態語を用いて表現してしまう傾向も見受けられた。このため発言の中で言葉を置き換えさせたり、国語辞典を用いながら関連した言葉を紹介したりする場面を増やす指導を重視した。また、話し合いでは、長く発言する生徒に限られてしまう傾向があるので、伝えたいという気持ちをもたせるためにも、課題設定の仕方が重要になってくると考える。

学力面でも学習意欲の面でも、まだまだ課題の残る生徒たちである。基礎基本の定着を図りながら、学ぶ楽しさを少しでも多く味わわせられるよう、さらに授業改善に努めていきたい。

算数・数学

学力格差をなくすために！

宮田小学校 高畑 清美

クラスの子どもたちの算数の学力格差が気になり、なんとかして、子どもたちの学習意欲を向上させ、クラス全体のレベルアップを図りたいと思った。

まず、授業に意欲的に参加できるようにするため、二つのことに力を入れた。一つ目は、授業中1回は発言できるようにしたことである。簡単な発問を取り入れ、あまり発言しない子どもたちを意図的に指名した。また、「全員発表」を合い言葉に授業に臨み、発表しようというクラスの雰囲気づくりに努めた。二つ目は、授業の終末の振り返りの場での確認である。①発言の回数②分かったこと③誰の発言を聞いて分かったのか④自分の頑張ったことを書くように指導した。これは、学習を理解したかどうかがよく分かり、次の授業への参考になった。

上記のことを授業中に、継続的に指導してきたことで、子どもたちが意欲的に授業に参加するようになってきた。そして、もっと分かりたいという思いが、強くなってきている。今後、学び合うためのペア学習も効果的に取り入れ、更にレベルアップを図っていきたい。

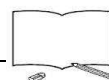
考えることが好きな子どもにしたい

窪小学校 大森 智香子

4月に行った学力調査の結果、算数科の本クラスの正答率は「技能」「知識・理解」に比べて「数学的な考え方」が低かった。やはり、子どもたちの学力を高めるためには、問題を筋道立てて考え、解決する力を育てることが大切だと感じた。

「課題をつかむ」⇒「見通しをもつ」⇒「自分の考えをもつ」⇒「話し合いをする」⇒「学習をまとめる」という授業の流れを子どもも意識できるようにした。1学期は特に「自分の考えをもつ」段階に重点的に取り組み、自分の考えをノートに書く時間を大切にしたい。その際、問題の内容を整理し、考える楽しさを感じることができるよう、絵や図、言葉、計算式などを用いるように指導した。考えをもちにくい子どもにはヒントを与えたり、席の近い友達と相談したりする場を設けたりした。

「数学的な考え方」の正答率は、7月の学習のたしかめでは、4月の学力調査より15%ほど上昇した。また子どもたちへの意識調査では、「算数が好き・どちらかというが好き」は、6月上旬68%→7月中旬75%になった。今後は、「話し合いによる学び合い」の充実にも努め、考えることが好きになり筋道を立てて考えられる子どもを育てていきたい。



自分の考えをもつために

十二町小学校 城下 晴美

算数の学習で問題を解決するためには、まず、見通しを立てて、自分なりの考えをもつことが必要である。しかし、問題を前にどうしてよいか分からず進むことができない子どもたちがいる。そんな子どもたちに解決する喜びを味わわせたいと考え、自分の考えをもつための2つの手だてを工夫してきた。

一つ目は、問題文にある解決の糸口を見つけるための手順を明らかにすることである。立式に必要な情報を読み取って印を付けたり、書き出したりさせた。二つ目は、問題解決への見通しをもつ時間を大切にすることである。見通しが立っている子どもたちの考えを広め、クラス全員が見通しを立ててから自分の考えをもつ時間を設定した。

このことにより、自力解決できなかった子どもたちが、進んで問題文に線を引いたり、友達の考えを真剣に聞いたりするようになってきた。また、ノートに課題解決のために図を描く子どもが5月は21人中8人であったが、7月には11人と増えてきた。2学期は、「見通しをもち自分の考えをまとめる」ことを家庭での予習課題とし、問題解決できる喜びを味わわせたい。

正答率が9%から37%へアップ

南部中学校 濱井 孝久

第3学年の生徒を対象に「数学レポート」を実施した。課題として選んだのは、数学の教科書(P6~7、P15)にも載っている『8の字サイクリング』である。1回目は、分かりやすい図(マス目あり)を用いて課題を設定し、2回目は発展的な考えができるように複数の図(マス目なし)を用いて課題を設定した。最初は、レポートに抵抗を感じていた生徒もじっくりと取り組む時間を与えることで、レポートを完成させることができた。また2回目からのレポートでは、自分の考えを明確にし、どのように書いたら相手に伝わりやすきに重点を置き完成させていた。多くの生徒が、感想として「分かったときはおもしろくて、とてもすっきりした気分になった。」「すごく達成感があった。」と書いていた。

じっくりと考え、書き表すという経験を生かし、全国学力・学習状況調査(B問題)に出題されていた国際宇宙ステーションと気象衛星ひまわり7号の問題に再挑戦させると正答率が9%から37%へアップすることができた。数学レポートは、書くことへの抵抗感をなくし、課題を深く考えるということにつながったと考える。今後は、生徒が自らの成長を自覚できる自己評価について工夫していきたい。

ステップアップ方式の授業で分かる授業を！

十三中学校 有島 千里

「生徒にとって分かる授業とはどんな授業なのだろうか」と考えた結果、たどり着いたのが、ステップアップ方式の授業である。生徒の視点に立って、スモールステップでレベルを設定すると、生徒はステージをクリアしていくゲーム感覚で、授業に意欲的に取り組む。内容を構造化し、次のレベルは今のレベルとどこが同じで、どこからどう違うのかということを把握させると、生徒は順調に解き進んでいく。また、生徒自身も自分がどこまで分かっている、どこで分からなくなっているのかを理解できているので、級友や先生にも質問しやすく、さらにはここまでできたという達成感を味わうことができる。教師も生徒一人一人の状況を把握しやすく、つまづきに応じた適切な指導ができる。

本年度、新学習指導要領全面実施に伴い、教科書が改訂されて、合同条件の言葉が変わっていたり、履修学年が移動していたりするなど、少なからず変化が見られる。新学習指導要領に照らし合わせて、内容を確認し、構造化し直す必要がある。今後も、生徒の習熟やニーズに合わせたステップアップ方式の授業を取り入れ、生徒にとって分かる授業、達成感の得られる授業を心がけていきたいと考える。

※ 下線で示した部分は、各実践者が特に力を入れて指導の工夫を図ったり、強調して記述したかったりした部分を示す。